

衛研ニュース

No.147



表紙写真説明 平成20年1月末に厚生労働省より、中国産冷凍餃子が原因と疑われる健康被害事例(有機リン中毒の疑い)の発生について発表されました。当衛生研究所においては、県内で流通した当該冷凍餃子の残品のうち5件について、健康被害の原因と疑われる有機リン系殺虫剤のメタミドホスとジクロルポスの検査を実施しました。結果は両農薬とも検出されませんでした。
(理化学部 阿部 恵子)

も く じ

- ※ 山形県感染症患者発生状況(2007年)山形県感染症情報センター 保科 仁(2)
- ※ 薬になる植物(78)サジオモダカについて理化学部 笠原 義正(4)

編集発行 山形県衛生研究所

平成20年3月10日発行
 〒990-0031 山形市十日町一丁目6番6号
 Tel. (023) 627-1108 生活企画部
 Fax. (023) 641-7486
 E-mail : eiken@pref. yamagata. jp
 URL : http : //www. eiken. yamagata. yamagata. jp/

山形県感染症患者発生状況 (2007年)

山形県感染症発生動向調査事業に基づき、県内の届出指定医療機関(76定点)から、各週・各月に寄せられた情報のうち、2007年1月から12月までの主な感染症の患者発生状況について報告します。

1 定点把握感染症【週報】

(1) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎(図1)

2007年の患者数は4,000人(133.33人/定点)で、2006年の4,599人(153.3人/定点)を下回って報告されました。本県の定点当たりの報告数は、年間をとおして全国平均を上回って推移しました。地区別では、1月上旬～5月下旬は村山地区、5月下旬～10月下旬は置賜地区、10月下旬以降は庄内地区から多く報告され、最上地区では11月上旬～12月上旬に小流行がありました。患者は5歳をピークとして、2歳～8歳の小児が全体の約80%を占めました。

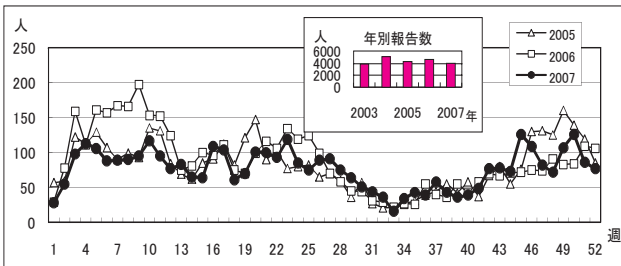


図1 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

(2) 感染性胃腸炎(図2)

2007年の患者数は10,781人(359.37人/定点)で、1999年以降では2000年の11,429人(380.97人/定点)に次いで2番目に多く報告されました。本県の定点当たりの報告数は、4月中旬～5月下旬及び10月下旬～12月下旬に全国平均を上回って推移しました。11月～12月は2006年と同様に高齢者施設等の集団発生事例が報告されるなど、県内各地で流行しました。当所では、患者の便からノロウイルス(GⅡ)の遺伝子を検出しました。地区別では、1月上旬～4月中旬が庄内地区、5月上旬～11月上旬は置賜地区、11月下旬～12月上旬が庄内地区、12月は村山地区から多く報告されました。

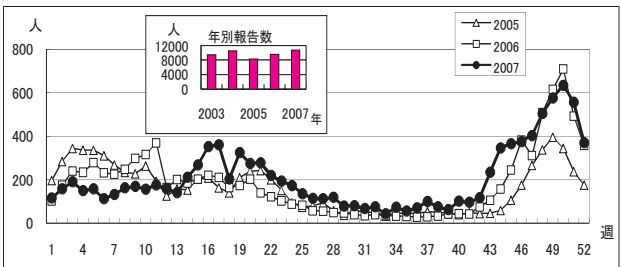


図2 感染性胃腸炎

(3) 水痘(図3)

2007年の患者数は2,616人(87.2人/定点)で、1999年以降では2004年の2,583人(86.1人/定点)の次に少ない年でした。本県の定点当たりの報告数は、1月は全国平均を上回り、2月以降はほぼ全国平均並みで推移しました。地区別では、1月は庄内地区、2月下旬～4月下旬は村山地区、5月上旬以降は庄内地区又は置賜地区からの報告が多い状態が続きましたが、11月以降には最上地区でも流行がありました。患者は3歳をピークとし、1歳から4歳の小児が中心で全体の約72%を占めました。

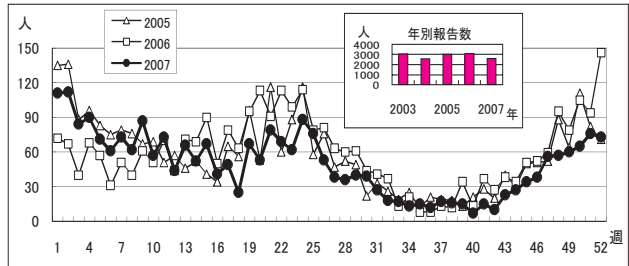


図3 水痘

(4) 手足口病(図4)

2007年の患者数は2,022人(67.4人/定点)で、1999年以降では最も多い年でした。本県の定点当たりの報告数は、ほとんどの週で全国平均を上回って推移しました。特に、6月上旬～10月上旬では大きな流行が続きました。地区別では、6月上旬～8月上旬は村山地区が他の地区を大幅に上回り、8月下旬～10月上旬には置賜地区で流行がみられ、最上地区でも小流行がありました。患者は2歳をピークとし、1歳から5歳の小児が全体の約85%を占めています。患者からは主にエンテロウイルス71が分離されました。

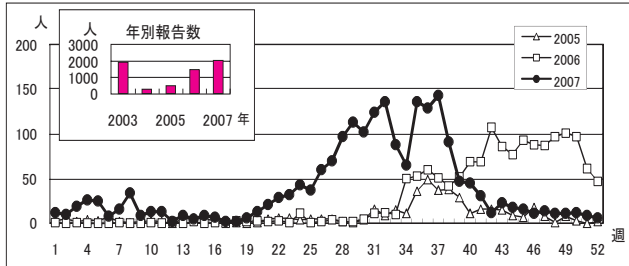


図4 手足口病

(5) 突発性発しん(図5)

2007年の患者数は1,335人(44.5人/定点)で、2006年の1,130人(36.67人/定点)を上回って報告されました。定点当たりの報告数は、ほぼ年間をとおして全国平均を上回って推移し、地区別では、ほとんどの週で置賜地区が他の地区を上回りました。

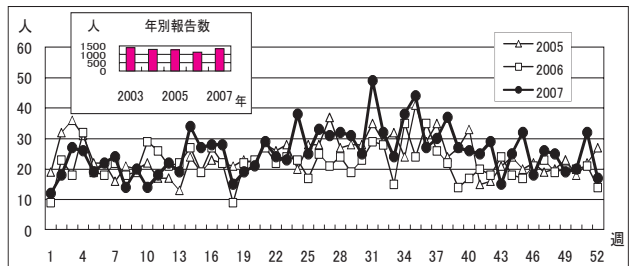


図5 突発性発しん

(6) インフルエンザ(図6)

2007年の患者数は13,018人(271.21人/定点)で、2006年の4,803人(100.06人/定点)を約2.7倍も上回り、定点把握感染症(28疾患)の中で最も多い患者数が報告されました。本県の定点当たりの報告数は、1月下旬～3月上旬に全国平均を上回って推移しました。地区別では、置賜地区がシーズンをとおして他の地区を上回り、最上地区では2月下旬～3月下旬に流行がありました。

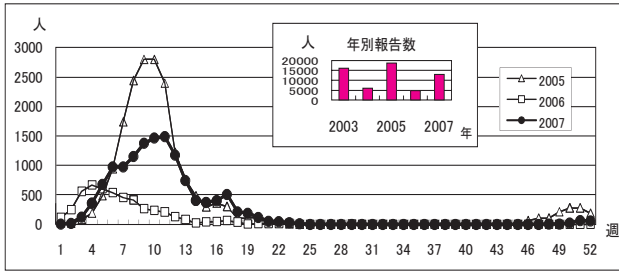


図6 インフルエンザ

(7) その他の感染症

①咽頭結膜熱は853人で、2006年(1,173人)の約73%に止まりました。置賜地区から406人の患者が報告され、県全体の半数近くを占めました。②伝染性紅斑は964人で、2006年(943人)をやや上回り、1999年以降では、2000年(1,527人)に次いで2番目に多く報告されました。③ヘルパンギーナは1,055人で、2006年(1,017人)を若干上回って報告されました。定点当たりでは、置賜地区と庄内地区が、他の地区を大きく上回って推移しました。④流行性耳下腺炎は279人で、2006年(2,425人)の約11.5%に激減しました。定点当たりの報告数は、最上地区が多く、特に11月中旬～12月下旬に他の地区を大きく上回りました。⑤RSウイルス感染症は612人で、2006年(85人)の7.2倍に増加し、2003年以降では、最も多い報告数となりました。1月～3月中旬と11月下旬～12月に大きな流行があり、地区別では、置賜地区が221人(36.8人/定点)で、他の地区を大きく上回りました。⑥2004年以降届出がなかった麻しんが、4月中旬～10月下旬に流行し、30人の患者(麻しん6人、成人麻しん24人)が報告されました。今年も流行する恐れがあるといわれていることから、免疫を持たない人は、感染予防のためにワクチンを接種することが重要です。⑦流行性角結膜炎は139人で、2001年から減少傾向にあります。患者の半数以上は最上地区(77人)から報告されています。⑧無菌性髄膜炎は38人で、2006年(18人)の約2倍の患者が報告されました。その内、約66%の患者が村山地方から報告されました。⑨マイコプラズマ肺炎は353人で、2006年(213人)の約1.7倍に増加しました。⑩クラミジア肺炎は34人で、2006年(11人)の約3倍の患者が報告されました。

2 定点把握感染症【月報】

(1) STD定点把握感染症(図7)

性器クラミジア感染症は173人で、2003年(423人)をピークに4年連続して減少していますが、依然として性感染症の中で最も多い疾患です。性器ヘルペスウイルス感染症は30人で、2006年(54人)を下回って報告されました。これまで増加傾向にあった尖圭コンジローマは34人で、2006年(58人)の約60%に止まりました。淋菌感染症は82人で、2003年(209人)をピークに減少傾向にあります。

しかし、本県の性感染症がいずれも減少傾向にあることについては、専門家から疑問視する意見が寄せられていますので、今後は定点以外の医療機関にも調査の対象を拡大するなど、より積極的な状況把握ができるように検討を進めていく必要があります。また、性感染症は、依然として15歳～29歳の若年層の患者が約半数を占めることから、感染の防止策について積極的な啓発活動が重要です。

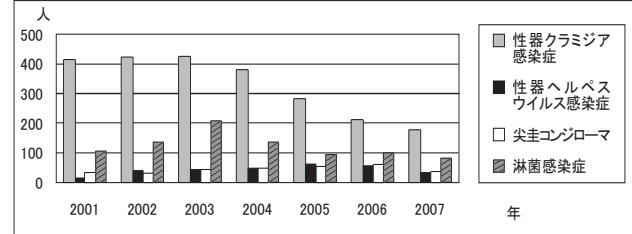


図7 STD定点把握感染症

(2) 基幹定点把握感染症(図8)

メチリン耐性黄色ブドウ球菌感染症は500人が報告され、2006年(407人)を上回りました。患者の約80%が65歳以上の高齢者です。病院や高齢者施設等における衛生管理を徹底することが重要です。ペニシリン耐性肺炎球菌感染症は109人で、2006年(128人)を下回って報告され、患者は5歳未満と70歳以上が全体の約88%を占めました。

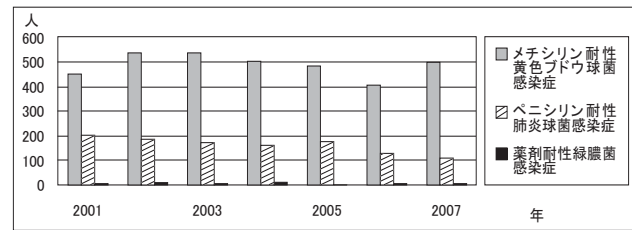


図8 基幹定点把握感染症

3 全数把握感染症【週報】

2007年4月の感染症法の改正に伴い、届出対象は71疾患となりました。その内、本県では14疾患の報告があり、最も多いのは結核で、139人(4月～12月)の届出がありました。次に腸管出血性大腸菌感染症が31人で、2006年(43人)を下回りましたが、依然として、結核を除く全数把握感染症の中で最も多い患者数が報告されています。レジオネラ症は11人で、2000年以降では最も多く報告され、つづが虫病は8人で、2006年(17人)の半分以下に止まりました。後天性免疫不全症候群は2006年と同じ4人で、その内2人はエイズ患者として報告されました。

(山形県感染症情報センター：保科 仁)

衛生研究所の論文・学会発表 (2008年1月～2008年3月)

学会発表

- 1) 笠原義正：トリカブト属植物およびツキヨタケによる食中毒について、全国自然毒中毒研修会 2008/1/24 横浜市
- 2) 會田健、高橋裕一、安部悦子、青山正明：空中スギ及びイネ科花粉アレルゲン(Cry j 1, Dac g) 濃度のインターネットによる情報提供と今後の課題、第34回山形県公衆衛生学会 2008/3/5 山形市
- 3) 安部悦子、會田健、鈴木道子、高橋裕一、青山正明、押切剛伸：ESRラジカルイムノアッセイ法による室内環境中ダニアレルゲン(Der p 1, Der f 2) の測定、第34回山形県公衆衛生学会 2008/3/5 山形市

- 4) 沼澤聡明、伊藤健、笠原義正：食用菊のピロリ菌発育阻止作用及びその活性物質の分離、第34回山形県公衆衛生学会 2008/3/5 山形市
- 5) 青木敏也、金子紀子、大谷勝実：山形県におけるマイコプラズマ感染症の分子疫学的検討、第34回山形県公衆衛生学会 2008/3/5 山形市
- 6) 金子紀子、青木敏也、大谷勝実、山田敏弘、吉田眞智子：山形県内で分離されたSalmonella PoonaのPFGE解析、第34回山形県公衆衛生学会 2008/3/5 山形市
- 7) 須藤亜寿佳、青木洋子、水田克巳：山形県で分離されたムンプスウイルスの遺伝子型別、第34回山形県公衆衛生学会 2008/3/5 山形市

薬になる植物 (78) サジオモダカについて

水辺に生息する植物には不思議な性質があります。地上の植物は土に生え、しっかりした根によって身体を支えているのに、湖沼や河川に生息するものは、根は水底にあるのに葉や茎が水上に出ているという形体になっています。海藻のようにすべてが水中にあるものは、身体が海水になじんでいると考えればわかりますが、水辺の植物は芽が出て大きくなるまでに腐らず枯れないで生長することが不思議です。このような植物を抽水植物ちゅうすいしょくぶつとといいます。ヒツジグサやウキクサが水面に浮いているのをよく見かけますが、これらは浮葉植物と呼ばれています。今回は水辺の抽水植物のうちオモダカ科のサジオモダカについて述べたいと思います。オモダカ科の植物にはオモダカ、アギナシ、サジオモダカ、ヘラオモダカ、マルバオモダカ、ウリカワなどがあります。オモダカはその形態が家紋や文様にも応用されており、特徴のある形をしています。このオモダカの塊茎が大きくなるように改良したものが正月に食べるクワイです。大阪の吹田でとれるクワイが有名でスイタグワイと呼ばれています。オモダカの葉は矢じりのような形をしています。サジオモダカはスプーン状をしています。つまり、匙オモダカということ。マルバオモダカ、ヘラオモダカも葉の形の違いにより命名されています。

概要： サジオモダカ (*Alisma plantago-aquatica*) はオモダカ科 (Alismataceae) の植物で、その塊茎を乾燥したものを沢瀉さくしやくと称して漢方薬の構成生薬とします。利尿薬、止渴薬として、尿の出にくい時

とか頻尿のとき、また、めまいやのどの渇きがある時に用います。沢瀉を配合した漢方処方には、五苓散、沢瀉湯、胃苓湯、牛車腎気丸、当帰芍薬散、猪苓湯、四物湯など多くのものがあります。薬効は『本草綱目』という中国の古い医学書に記してあり、「水を去るを瀉しやくといい、沢水の瀉しやくがごとし」と記されています。つまり、沢水がそそぐがごとく水分を排泄してしまうことをいっています。また、さらに古い『神農本草経』には、「風寒湿痺、乳難、五臓を養い、気力を益し、肥健ならしめ、水を消す。久しく服すれば耳目を聰明にし、餓えず、天年を延べ、身体を軽くし、顔面に光沢を生じ、能く水上を行き得る。」と記してあります。風寒湿痺とは、悪い風に当たったり、寒さや湿気が身体に入り込んで、気の流れや血液の循環をとどこおらせ、しびれ感や疼痛を起こすことをいいます。沢瀉には、これを治す作用があるということです。さらに、五臓を養い、気

力が益してきて、体内の余分な水分を消し去り、体を健康にし、長く服用していると身体が軽くなり、顔色も良くなり、長生きし、しまいには水上を歩くこともできるようになる？ということが書いてあります。これではまるで仙人になるための食事のようですが、水肥りのような人の水分の代謝を良くし、身体が軽くなることを誇張したのでしょうか。水肥りの人のダイエットには良いかもしれません。

成分： 沢瀉は塊茎なのでデンプンとタンパク質が多く含まれています。そのほかトリテルペノイドのアリソール A、B、C、アリスモール、アリスモキシド、コリン、糖類、アミノ酸が含有されています。これらのうちアリソール類には利尿作用があります。

薬理作用： ウサギやマウス、ラットを用いて利尿作用を検討した文献では、その作用はアリソール類であると報告しています。また、実験的に尿毒症をつくったマウスの症状を改善したという報告もあります。ラットの結石形成を抑制する作用も認められ、利尿に関する良好な効果を持つことが証明されています。さらに、イヌやウサギを用いて血圧降下が観察され、これはアリスモールという成分の作用と考えられています。また、ラットの肝障害を改善し、コレステロールを下げる作用も報告されています。このように、沢瀉は古来、利水止渴作用の要薬として用いられてきました。中国では沢瀉を用いた処方例が多くあり、興味のある使



い方をしています。みぞおちあたりが苦しく、めまいが起こるものの治療、暑気あたりで尿量が減少しめまいがあるもの、妊娠中の全身浮腫、のぼせて急に息切れするもの、便秘、体に熱があつてだるく汗が激しく出るもの、風邪で寒気がして震えるものの治療などが使用目標です。

同じ科のオモダカは薬用にはならず、サジオモダカが沢瀉として漢方薬で用いられることを述べてきました。しかし、オモダカの葉や花に特徴があるので武士の武具や家紋として愛用されていたので、そのオモダカを漢字で書くと「沢瀉」と書きオモダカと読ませます。そうするとオモダカも薬になるのではないかと混乱してしまうかもしれません。このようなことは歴史的によくあることですから気をつけなくてはなりません。薬草と思って用いていたものの効果がなかったらよく調べてみる必要があります。(理化学部 笠原 義正)